

株式会社ハレ(かなえるナース)

病院の天井を見るだけの人生を もう一度輝かせたい

今回、伊藤隼也は新たな看護サービス「かなえるナース」を提供する株式会社ハレの

前田和哉代表(看護師/保健師)取材。チャレンジングな試みと展望について聞きました。

※本取材はZOOMによるオンラインで行いました。

「きっかけは終末期の義母と撮ったウェディングフォト」

伊藤 ユニークな訪問看護サービスを実施しているとお聞きしました。

前田 終末期の患者さんを中心に、その方が叶えたいことを看護師がサポートするという事業を展開しています。通常の訪問看護は患者さんの療養を手助けするという目的に限られ、訪問も「自宅に1時間」という縛りがありますが、弊社のサービス料金は時間単位なので、どこでも、好き

なだけサービスを受けられます。

伊藤 それは面白い。その着想に至ったきっかけはあるんですか？

前田 がんを患う義理の母に結婚式に出席してもらいたいと思ったところが出発点です。私自身、救急の現場に5年、訪問看護の現場に2年いたので、この経験があれば重い病気を抱える義母でも結婚式に参列できるのではないかと。

伊藤 お義母さんも喜んででしょう。

前田 病状から式には間に合いそうになかったため、ウェディングフォト



髪を整え、メイクもきちんと。孫の結婚式に臨む(上)

ケアをする看護師もスーツを着用(下)

トを撮りました。最初は不安でしたが、介護タクシーで写真館に行き、着物を着て、メイクをし、ウィッグをかぶった義母はとても嬉しそうでした。

伊藤 僕もかつて岡山済生会総合病院で、院内結婚式取材したことがありますが、病気を抱えていてもお祝いごとには出席したい。それは人生を豊かにしてくれると思います。

前田 まさにその通りで、たとえ終末期であっても、大切なイベントに出席したいのであれば、その気持ちには応えていきたい。病院の天井を見るだけの人生をもう一度輝かせたいんです。何よりそれは無謀なことではなく、看護師がいればできると肌で感じています。

伊藤 新郎新婦が2組いる写真

さを感じますか。

前田 「患者さんが自分の人生を、最後まで思い通りに生きる、楽しむ」というところにはほど遠いです。

「温泉、引越し、帰省……」
起業でわかった意外なニーズ

伊藤 そこにあえて切り込んだのが、「かなえるナース」なんです。結婚式にこだわっている理由は？

前田 きっかけが義母を撮ったウェディングフォトだったということと、それくらいの重要なイベントでない、これだけの金額は払ってもらえないだろうと考えました。

伊藤 周りの反応はどうですか？

前田 「自由診療で大丈夫？」「お客さんが来ないのでは？」という心配する声と、「本当は、そういう看護をやりたい」「自分もいつか利用したい」という応援する声がありました。

伊藤 収支はどうですか？ 起業して4年目です。

は？

前田 患者さんの最愛のお孫さんが同じ時期に入籍されたんですね。コロナ禍でもあったので、自宅で結婚式を挙げるという弊社の企画に応募してくださいました。

伊藤 笑顔がとても素敵です。

前田 患者さんが「おめかししたい」と希望されたので、プロにヘアメイクをお願いしました。準備が整ったところでお孫さんが部屋に迎えに来たのですが、「来てくれたのね！」って、歓喜の涙。コロナ禍で控えていたハグを、孫の新郎だけでなく新婦ともされていて、とても印象的でした。

伊藤 僕が院内結婚式取材した15年前と違って、前田さんたちは新しい時代の看護師だと思えますが、それでもまだ日本の看護現場に不自由

前田 結婚式だけでは赤字ですが、別のところで需要があることに気がきました。「自宅に帰りたい」「家のベットの会いたい」「旅行したい、温泉に入りたい」「帰省したい」というご希望が多いんです。そうなる1日、2日単位でのご依頼になるので、そこで収益を確保できています。

伊藤 やっぱり自宅に帰りたいんですね。今までできなかった旅行もしたい。それは痛いほどわかります。でも、帰省したいというのは？

前田 実は、依頼される方のなかには、50、60代の若い方もいて、まだご両親が存命なんです。だから最後に一度、自分の故郷に帰って親に会いたいという希望があるようです。

伊藤 それぐらいの年齢ということ、がん患者さんですか？

前田 多いです。先日は、若い頃に仲違いした両親に会っておきたいということ、沖縄まで患者さんをお連れしました。30年ぶりに和解された2日後に亡くなりましたが、単に実



孫2人の結婚式。会場の自宅のリビングは華やかな雰囲気包まれた

「自由診療で看護サービスを提供」はありそうでなかった新しい考え方だろう
看護の世界にもパラダイムシフトが起こりつつあることを感じた



前田 和哉さん
株式会社ハレ 代表取締役

PROFILE

2009年、京大医学部保健学科看護学専攻卒業。聖隷福祉事業団聖隷浜松病院救急集中治療室、ケアプロ株式会社ケアプロ訪問看護ステーション東京を経て、18年にハレを設立。2016年から日本看護連盟役員青年部担当幹事。都内専門学校にて非常勤講師も勤める。

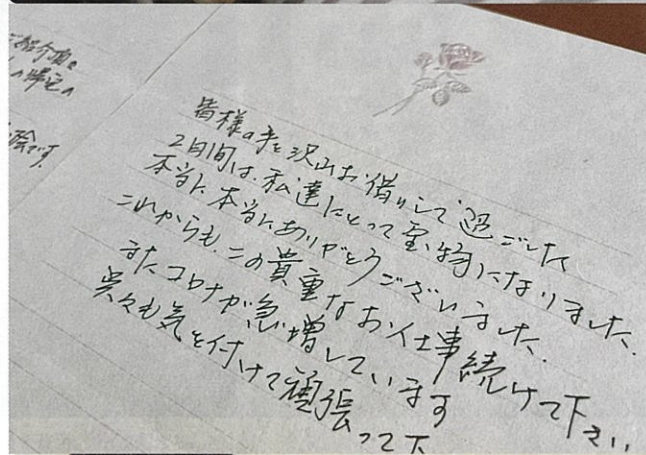


家族で念願の温泉へ。脱衣所から酸素チューブを10mほど延ばし対応



前田さんが持ち歩く7つ道具。ディナーエプロン(左)はドレーブのような見た目

自宅で待つ愛するペットに会いたいと希望する患者さんも多い(左上)
「かなえるナース」に届いた感謝の手紙(左中)
娘の結婚式に参列した父親。久々に味わうシャンパン(左下)



家に帰りたいとか、旅行を楽しみたいとかではなく、皆さんももっと深く重い目的を持たれ、依頼してこれれます。サービスは私が考えるよりも多様な使い道があつて、その用途を皆さんが発見して下さっています。

「依頼は医師の承諾が必要
医療従事者の理解が課題」

伊藤 皆さんは、どういう理由で依頼されるのでしょうか。

前田 会社のホームページからの依頼は多くなく、今は医療機関の退院支援ナースやソーシャルワーカーから紹介いただいています。営業もそういう部署に足繁く通っています。

伊藤 依頼があつたら、どんな流れでサービスを行っていくのですか。

前田 まずは患者さんの希望を聞き、その上で主治医の指示を受けます。契約書も交わします。送り出す側からすれば、とても不安でしょうから、そこを払拭するためにできる限りのことはします。

伊藤 そこは丁寧に進めるべきところですね。それでも希望が叶わなかったケースもあるでしょう。

前田 スケジュールを調整しているうちに体調を崩されて……ということが多すぎ多いです。医師が大反対

「人生を楽しみたい」というのは
終末期の患者さんであっても同じこと
医療者は従来の価値観に固執せず
その夢を精一杯応援してほしいと思う

し「責任問題だ。絶対に認めない」と、息子さんの結婚式に出られなかった患者さんもあります。

伊藤 医療者の中にはまだまだ新しい価値を認められない人もいて、そのあたりの障壁は大きいですね。

前田 今の話は私の耳に届いたケースですが、届かないケースもたくさんあると思うんですね。そう考えると、非常に残念です。

伊藤 万が一、容体が悪化した場合はどう対応されるのでしょうか。

前田 事前に受けた医師の指示に従って対応します。例えば、以前スカイツリーに上った患者さんが展望台で

きれんを起こしたことがあります。

その際は用意していた抗いれん剤を注射して事なきを得ました。幸い、私たちが今まで関わっている中ではこれ以上の急変はありませんが、そういう状況もあり得るので、主治医やご家族にはしっかりと説明しておく必要はあります。もちろん、医師から禁止された行為は一切行いません。

「コロナ禍で新しい提案も
これからの看護サービスとは」

伊藤 サービスの利用中に患者さんが亡くなるケースも考えられます。

前田 想定されるのは「客死」です。旅先や出先で亡くなることを国は想定していないのか、その際の手続きがとても煩雑なんです。搬送先や警察への連絡はもちろん、私たちのような立場の人間の責任の所在とか、そのあたりはまだ法制化が不十分なので、明確にしてほしい。

伊藤 患者さんが気兼ねなく出かけ

られる社会作りには、サービスだけでなく、法制化の議論も必要ですね。今後はどんなふうにも事業を展開されていくのでしょうか。

前田 今、考えているのは、コロナ禍で結婚式を控えている方への「自宅結婚式」の企画、サポートです。ご自宅にブーケやドレスを届けて、しっかりヘアメイクして記念写真を撮るという。自宅で安全に思い出を作ってもらえたらと考えています。

伊藤 訪問看護では看護師さんはユニフォームかジャージを着ていくことが多いけれど、写真を見ると看護師さんもスーツを着ていますね。

前田 ご家族により思い出を作ってもらいたいので、私たちもできる限りの正装をします。

伊藤 いいですね。

前田 結婚式の参加を経験された患者さんが、「長く生きていると、こんなによいことがあるのね」とおっしゃられて。それがとても心に残っています。この国ではまだ患者さんの「楽しい」を受け入れない感じがあります。終末期の患者さんでも楽しんでいただけるようなサポートをこれからもできたらと思います。

伊藤 コロナ禍で看護に希望を見いだせず、疲弊する看護師さんこそ、このサービスを手伝ってもらいたい

ですよ。看護の楽しさを思い出してもらえないかもしれない。

前田 私もまさにそう思っています。募集する予定なんです。月に1回、2回「かなえるナース」で、こういう看護を経験してもらいたいです。

伊藤 週刊誌などで「終活」特集が組まれるなど世の中は終活ブームですが、理想の最期を迎えられる人はほんの一握りで、現実はそのなかに甘くない。痛みや体の不自由を抱えながら、その人らしい生き方を貫くには、医療や介護のサポートが必要です。一人の看護師の「あつたらいいな！」がこのようなサービスに発展していったことは本当に素晴らしい。従来の看護の殻を破る活動やビジネスを、今後も応援したいと思っています。

伊藤 隼也
(いとう しゅんや)

医療ジャーナリスト・
写真家
医療情報研究所代表

profile

患者中心の医療を実現するため医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中
ホームページ shunya-ito.tv

